

離婚もまた

一つの選択

吉田清彦

私は二度結婚して二度離婚している。ひとたび結婚したものが、途中で別れるということば、別れた理由がどうであれ、少なからず相手も傷つけたわけで、それに対しては忸怩たるものがある。しかし、それはあくまで当の相手に対するものであって、それ以外の人達に対しては別に恥ずべきことだとは思っていないので、別に隠す気持ちもない。もちろん、それを自慢する気など毛頭ない。ただ、結婚というものに対する私の現在の考えを述べる時、あるいは男の自立や女の自立を語る時、どうしてもそういう風に考えるようになってきたかを説明しようとすると、どうしても自身自身の体験を避けて通るわけにはいかない。ところが離婚と聞いただけで眉を顰める人がいる。

東京から発行されている『新しい家庭科—We』という雑誌に「男である私の『自立』」という短文を書いたことがある。そこで私は、自分自身の二度の結婚の差きを振り返りなが

ら、男女の性別役割分業に支えられない、対等で自由な男と女の有り様を提唱したのだが、それに対して、三児を持つ四十四歳の母親から次のような投書が寄せられた—

「何度か結婚して、今度は同棲しようか、などと書いた人など、何を考えてんの。あんな人と共に生きようなどと、大切に思う人が出てくるわけないヨ、と言いたくなります。経済力があれば何をしてもいい、法律にひっかからなければ、人の痛みなどおかまいなしの人が、公に文章など書いてほしくないと思います。」

さまざまな会合に出て「過激」な発言をくりかえしていると、あからさまな嫌悪をぶつけられることもよくあり、そういうことには慣れているとはいえ、この投書を読んだ時の私の驚きは大変なもので、瞬時血の凍る思いであった。

街角で見も知らぬ人を摺って行った発言ならいざしらず、少なくとも「自立した男と女」を掲げて「新しい家庭科」を直指そうという『We』の読者からのこのような罵詈雑言は、例えて言えば、一心に敵と闘っている時に、思おもかけず味方の陣地から無防備な背後に石つぶてをくらった感じであった。

ところで、彼女の怒りの理由は私の全体の

文意にあるというよりも、私が離婚した、それもあろうことか二度もした、というところにあると思われる。二度も離婚した者が、臆面もなく「公に文書など書いて」いる。そのことが許せない、のである。

彼女が、もし私の別れた相手だったら、いささか冷静さを失っているとはいえ、その怒りがわからぬでもない。

しかし、彼女と私は見ず知らずで、何の関係もないし、ましてや私は彼女との間に「対等で自由な男の女の関係」を持つなどとしているわけでももちろんない。

私はあくまで、私の考え方・生き方を提示してみせたにすぎない。それを他人に押しつけようなどという気も毛頭もないし、また押しつけられるはずもない。

人はそれぞれの思いを抱いて生きていて、時折その思いを他人に伝えたい時もある。そしてその思い、いわばメッセージを他人がどう受けとめようが、あるいは拒絶しようが、それはその人の自由である。

だから四十四歳の母親が「理解できない」と言うだけでなく「私は嫌いだ」と言い、嫌悪感を表明するところまではわかる。しかしながら、それを「許さない」とか、いわんや「公に文書を書く」ことにまで口を出すのは

いささか度を越しすぎているのではないだろうか。

少数意見排除の論理

ところで、こういう人達は、実は私達の身の周りに意外に多くいるのである。ありてい
に言えば、こういう人達の方が「世間」では
多数派を形成している、と言ってもよい。

どういふ人達かという、みずからは傷つかぬ安全な所に身を置いて、特定の個人に対して非難を浴びせる人達である。

日本人は一体に論争や討議の下手な人種だと言われている。それは、日本が、四周を海に囲まれた単一民族国家だからという解釈が一般には広くなされているが、厳密には、アイヌ民族や琉球弧の人達、あるいは韓民族の血を強権的に「日本民族」に統合してきた歴史が日本にはある。

日本人の間で建設的な論争が育たない本当の理由は、自立した個というものの意識が歴史的に育て上げられてこなかったからだと思は思うが、ともあれ、論理的な正当性を争うよりもさきに「好き・嫌い」という感情的な判断レベルが優先されてしまう。

ところで、論理が正当性の基準にならないとすれば、一体何が「正当性」の基準にされるかという、それは多数派であること、も

っとありていと言えば、「オカミ」≡権力により近いことが「正当」の保証とされる。

「オカミ」≡権力を唯一の正当となし、自立した個の思想が育てられなかった風土では、次のようなことが容易に起こりうる。

すなわち、全体の名のもとに、少数意見が排除される。より正確には、少数意見を持つ者が排除される。

正しいものがオカミであり、それはもちろん一つでしかありえないので、「人それぞれの考え方・生き方」というのは認められない。いわば「一億一心」の思想が今も息づいている。

少数意見を持つ者は、異端者というより、全体を乱す者、全体に手向かう者として指弾される。

このようにして「離婚した女や男」や「結婚しない女や男」、「未婚の母」や「家事をする男」などが、現代版の村八分や魔女狩りの対象として血祭りにあげられる。

「正しいもの一つだけ選べ」というマークシート方式の現代教育や、そこから必然的に引き起こされるイジメも、当然この現代版村八分と同じ根を持つものである。

ところで、この村八分≡魔女狩りのやっかいなところは（というより、仕組みの巧妙さ

というべきであろうが）、すでに述べたように、少数者を指弾する者が、みずからは正しい、と信じて疑わないところにある。

「まとも≡正当」な結婚生活を送っていると思われる四十四歳の母親が、「二度も離婚した」私に対して、あからさまな嫌悪感を示して「公に文章など書いてほしくない」と言っているのは、「正当性は我にあり」と思っているからである。そのような彼女にとってみれば、私が「公序良俗」に反する者、すなわち全体（の秩序）を乱す者と映るのは当然のことであろう。

彼女の生き方・考え方は、実はオカミ≡権力にお墨付きをいただいたもので、私がオカミ公認の「公序良俗」に反する生き方をし、意見を述べるといふことは、ひいては彼女の生き方が脅かされ、否定されるという潜在的な怖れが、彼女のあのような発言になった、ということを知れば決して気がつかぬであろう。「人にはそれぞれの生き方・考え方があり、最終的に恃むのは自分しかない」という考え、すなわち自立した個、という発想がないと、人はたやすくオカミの御威光に頼るものであらう。

問われるべきはその中身

一般には、結婚は無条件に良くて、離婚は

無条件に悪いと思ひ込んでいる人も多いが、結婚が一つの選択であり、一つのスタートであるように、離婚もまた一つの選択であり、一つのスタートである。

別れないでやり直すということも、たしかに一つの選択であるが、それと同じように、別れて、それぞれにやり直す、ということもまた一つの選択である。どちらが良くて、どちらが悪いということはいいうるはずがない。

離婚に際して、「無責任」あるいは「甲斐性なし」という非難が、普通男のほうに対してより多く浴びせられるが、女の側から離婚を申し立てるケースが増え、それに対して男がさまざまな理由で拒むことが多いという現状を考えあわせると、離婚しないことが男の「甲斐性」かどうか怪しくなってきた。

また、結婚によって女を幸せにするのが男の務めという考えも根強くあるが、これは裏返せば、女の幸せは男が運んでくる、すなわち女の幸せは一手に男にかかっている（女の殺生与奪の権利は男が握っている）という男優位の女性差別思想に他ならないのではないだろうか。

離婚も、結婚も、それ自体が良いとか悪いとかではなく、問われるべきはその中身、なぜ離婚（結婚）するか、どのように離婚（結

婚）するか、であろう。

離婚する人に対しては、

「どうして別れるの？」

「なにが原因なの？」

「別れたあと、どうやって暮らしていくの？」

と、非難と同情とを織り混ぜた質問を執拗に浴びせて、離婚の理由を探りだそうとする人達が、結婚する人に対しては、

「どうして結婚するの？」

「結婚して、どうするの？」

などと、結婚の「理由」や「中身」を問わないのは、考えてみれば不思議なことである。

繰りかえしているのが、結婚も離婚も、一つの選択であり、一つのスタートである。

問われるべきは、その中身である。

それを「選んだ」という「決意」や「勇気」に対して祝福をするのなら、結婚に対しても、離婚に対しても等しなみに「おめでとう」

「よくやったね」の言葉が投げかけられても、本当は少しもおかしくない。

結婚だけが無条件に祝福されて、離婚は無条件に非難されるのは、どう考えても不公平である。

「男」と「女」を考える本・10冊

「シングル・ライフと女と男の解放学」

海老坂武著 中央公論社 一二〇〇円

「結婚以上」

落合恵子著 中央公論社 三四〇円

「自然な関係」

吉田真由美・山本コウタロー著 教育史料出版会 一三〇〇円

「怪傑！ハウスハズバンド」

村瀬春樹著 晶文社 一二〇〇円

「なぜ、愛し女にとって結婚とはなにか」

ばばこういち著 二見書房 九八〇円

「結婚の向う側とその愛にふみ切っているか」

駒尺喜美著 主婦と生活社 八八〇円

「家事・育児を分担する男たち」

福岡・女性と職業研究会編 現代書館 一四〇〇円

「再婚」

川名紀美著 朝日新聞社 一二〇〇円

「さようなら男の時代」

三枝和子著 人文書院 一五〇〇円

「男が変わる／＼自分自身への独立宣言」

守永英輔著 ダイアモンド社 一一〇〇円

(尼川洋子・選)